

雲
の
上
の
人



由納言

謝辞

表紙：<http://piece2003.com/>様の写真より。

有り難うございました。

(1) 愚痴-1

「それにしても寒いねえ、うう寒！」

僕が熱燗片手にそう呟く。

「お前が入り口に近い席を選ぶからだろうが！」

すかさず同期の丸尾が僕に文句を言う。

今は一二月初旬、街はクリスマス一色。僕は珍しく丸尾に誘われて、新宿の安い居酒屋『昇り調子』で飲んでいる。メンバは僕と丸尾の二人だけ。さりげなく携帯電話を見ると既に十一時を過ぎていた。

「焼き鳥盛り合わせッす！」

元気の良さそうな店員が注文したつまみを持ってやって来た。

「ありがとう」

僕は礼を言って皿を受け取る。そして受け取った皿を黙って自分の前に置いた。

「ちょっと待て吉沢！ お前がそれ全部食っちまうつもりかよ！」

「良いだろ、これはささやかな自分へのボーナスなんだ」

「俺の分も少しくらい寄こせよ！」

「いいか！ 良く聞け！ 僕はこの冬ボーナス七割カットなんだぞ」

「マジかよ？ そいつは酷いなあ……。と見せかけて頂きっ！」

「ああっ！」

隙を突かれた僕はあっさりと焼き鳥の盛り合わせを略奪されてしまった。そして最初に目を付けていた手羽先は早くも丸尾の餌食になっている。

「はあ……」

思わずため息がこぼれた。

僕と丸尾は同じ大学から同じ大手メーカーへ同期入社した。入社した当時は大手メーカーだった会社も僕達が中堅になる頃には中手メーカーへ落ちぶれてしまった。そんな僕達は人生の選択肢を間違った盟友ともいえる。

僕達二人に大きな違いがあるとすれば、僕が平社員でちまちました仕事をしているうちに、丸尾は課長まで昇進した事だろう。丸尾は気にしていないようだが僕にしてみれば気にならないはずがない。部署は同じだが課の違う事がせめてもの救いだ。

「やれやれ、僕は順調なお前が羨ましいよ」

僕は手羽先にむしゃぶりつく丸尾に向かって思わず本音がこぼれた。

(1) 愚痴-2

「何のことだよ？」

タレで汚れた口をフキンで拭いながら丸尾は僕に訊く。

「そんなに手羽先が欲しかったのかよ？」

「そうじゃないさ。僕が言っているのは人生についてだよ」

僕はおちょこに日本酒を注ぎながら応えた。

「人生だあ？ 聰美をゲットしておいてまだ人生に不満があるのかよ」

「聰美かあ、はは。お前にしてみればそうかもな」

「マジでむかつくなぜ」

聰美は僕の妻だ。そして彼女は大学時代に学内のミスコンで優勝を飾った華々しい経歴を持つ。丸尾は何気に聰美に執心だったのだ。しかしそんな彼女は何故か僕と一緒にになった。結局聰美とは大学卒業後すぐ結婚した。とはいえる丸尾も既婚者だ。

「なんで聰美がお前の嫁なんだよ！」

「僕に言うなよ、文句があるなら聰美に直接言ってくれ」

「本人の前で言える訳無いだろう！ お前も聰美に余計な事を言うなよ」

「ははは、分かってるよ」

というのは嘘で丸尾の言った事は僕を通してすべて聰美に筒抜けだったりする。

悪いな、丸尾。

「今度バーベキューパーティでもするかい？ 大学の頃みたいにさ」

「けっ、そんな気分の悪いイベントに参加するか！」

「あはは、冗談だよ」

軽く丸尾をからかう。

「ちえつ」と舌打ちして丸尾はビールを飲み干す。

「でも、実際問題さ、男の人生は経済力だと僕は思うよ」

僕はおちょこを口にしながら話題を変えた。

「ああっ？ 経済力？ どういう事だよ」

「つまりさ、たとえ同じ会社にいたとしても僕みたいに薄給だといつ嫁に愛想を尽かされても不思議じゃないって事さ」

「ん？ いやいや、俺だって年俸制だから来年の今頃はどうなっているか分からんぜ」

丸尾はテカった顔をタレで汚れたフキンでぬぐう。

焼き鳥のタレで余計に顔がテカっているような気もしないではないが、敢えて触れないでおこう。

「課長様ともあろう方が何をご冗談を」

「バカだな、管理職は労働組合員じゃないからいつ肩たたきにあってもおかしくないんだぞ。しかもこの不景気だしな」

(1) 愚痴-3

「へえ、そういうものなのか」

それは知らなかった。エライ奴にはエライ奴なりの苦労があるって事か……。でも、やっぱり僕は課長の丸尾が羨ましい。

「それにしても、こんな世知辛い会社に誰がしたんだろうなあ」

「そりや、社長様に決まってるじゃないか」

僕は迷わずそう答えた。

「やっぱり、そのののかなあ」

「社長が働かないから僕達は苦労するんだよ。何せ僕は社長の顔を見た事ないくらいだし」

「がっはっは！ そういうやうちの社長は社員に顔を見せた事無いもんな」

「そうだよ、僕達の入社式の時も体調不良だとかいって顔見せ無かったしさ」

「ああ、あったなあ！ そんなこと」

「この前のリコール問題の時も顔出さなかつたじゃないか？」

「がっはっは、そういうやうだ！」

「だからさ、やっぱり重要なのは説明責任だと思うんだよ。きちんと顔見せて説明して欲しいんだよ」

「吉沢の言う事ももっともだ！ ん？」

丸尾は串の盛り合わせを一人でぱくつきながらふと何かを思い出したらしい。

「そういうや、つい最近俺たちの社長変わらなかつたっけ？」

「ええっ？ 僕は知らないけど。もっとも社長なんて誰がなつてもかわらないよ、普段一緒に仕事するわけじゃないしね」

「まあ、そりやそうだわな」

丸尾は最後の串を豪快にビールで流し込むと、店員を呼ぶためにブザーを押しながら面白くもなさそうにこう言った。

「そもそも平社員とそんなお偉いさんが一緒に働いてたら可笑しいぜ」

「それはそうかもね」

僕はおちょこに残った酒を飲み干した。

「それにしてもさ、会社の社長は代わるし、ボーナスはカットされるし、僕達の会社もいよいよ負け組の仲間入りかな……」

思わず僕の口からため息がこぼれた。

「負け組って……そりや言い過ぎだろう、吉沢」

「無駄にでかい本社ビルを持つならせめてその分を僕達下っ端に還元して欲しいよ！」

「残念だけど、そりや無理だ」

僕の愚痴に丸尾が真顔でそう答えた。

「どうしてだよ？」

(1) 愚痴-4

「あの本社は借り物だからな」

「ええっ！ 冗談だろ」

「大マジさ。あれは聞くところによれば四井銀行の持ち物だぜ」

「どうも信じがたいなあ。じゃあ、最上階直通エレベータ前の前にあるレッドカーペットも全部借り物なのかい？」

「そういうこった」

「冗談は勘弁して欲しいよ。興ざめだも良いところだよ」

「まあ、事実だから仕方ないぜ」

「じゃあ、社長はその借り物のビルの最上階でふんぞり返っているって事かい？」

「まあ、そういうことになるかな……」

だとすれば社長には少し身の程をわきまえて欲しいものだ。

丸尾は注文のタイミングを伺っているが、忘年会シーズンのこの時期に男二人でしつぽり飲んでいる僕達に注意を払う店員がいるはずもない。丸尾は諦めてこっちを向いた。

「ところで吉沢、お前はどう思うよ？ 社長は普段何をしていると思う？」

「さあ、見当もつかないよ。ああ、あれだよ！」

僕はとっさの思いつきでこう答えた。

「きっと本社の屋上にある販促用の気球でも動かしているんじゃないかい？」

「あの気球か？」

本社の高層ビルの屋上には一体どんな経済効果があるのか不明だが販促用の馬鹿でかい気球が常時浮いている。

「そうだよ、きっとあの気球に乗ってフラフラ漂っているんだよ、屋上をね」

「がっはっは！ そりゃ面白い！ まさに『雲の上の人』だな」

僕と丸尾は揃って大笑いした。そして僕はこう言った。

「それでも僕は『雲の上の人』が羨ましいけどね」

「確かに」

その後、僕達は揃って大きなため息を吐いた。

(2) 昇進ー1

月曜日の朝、僕はいつも通り満員電車に揺られている。それにしても一体どこからこれだけの人間が湧いてくるのだろう。

前の禿げたおっさんが鬱陶しい。

斜め前のOLが色っぽい。

そんな意味のないことを考えているうちにいつの間にか僕は会社まで辿り着く。これが僕の毎日の日課だ。

会社といつても僕は本社勤務のエリート様ではないので、本社から二駅ほど離れたところにある雑居ビルに勤務している。僕は毎朝の日課のようにビルの警備員に挨拶をする。

「おはよう！」

「……」

僕のフレンドリーな挨拶を無言で返す警備員。これと言って代わり映えのないいつものコミュニケーションだ。

僕はこれまで同じ時間帯に出社する死んだ魚の目をした人の群で満員になったエレベータの籠に入り七階のボタンを押した。

ふう、それでも冬だと言うのに暑苦しい……。

それでも二階や三階で降りる奴は階段を使えよ。

僕が遅刻したら責任取ってくれよ、全く。

程なく籠は七階で停まり、僕はむさっ苦しさから解放された。どうやら今日も何とか定時ぎりぎりの出社に成功したようだ。

僕は自分のデスクに辿り着くと、床に鞄を置いて安っぽい椅子に座る。周囲の人間は既にパソコンを立ち上げて何やら社内連絡のホームページに見入っている。

「さてと……」

態とらしく声に出しながら、僕も遅ればせながら型落ちしたパソコンの電源を入れた。そしてせっかく座ったのにも関わらず一旦席を立つ。どうせパソコンが起動するまでしばらく時間が掛かる。僕は毎朝の習慣でたばこ部屋へ向かった。

それほど大きいわけでもないたばこ部屋は珍しく閑散としていた。いつもならもっと人がいても良さそうなものだけれど。僕が一服していると、後輩の神木が入ってきた。

「吉沢さん、おはようございます」

「ああ、おはよう」

この神木という青年は僕より数年後輩なのにバリバリのやり手だ。それでいて誰にでも人なつっこいところが魅力だろう。ちなみに丸尾の部下もある。

「吉沢さん、昇進ですね」

「何のことだい？」

(2) 昇進－2

「社内連絡をまだご覧になつてないのですか？」

「ああ、うん……」

僕はしどろもどろになってしまった。さすがに後輩の手前遅刻間際に出社したことは言い出しづらい。

「もし良かつたら挿い摘んで教えてくれないかな」

「はは、構いませんよ。吉沢さんは、僕達の課の課長に昇進されました。おめでとうございます」

「はあ？」

僕は神木の言葉の意味を理解出来ない。

そもそも今は異動の時期ではないし、仮に僕が昇進したとしても係長だ。係長をすっ飛ばして課長になった奴の話しなんて聞いたことがない。

「それは本当なのかい？」

「ええ、本当ですよ。ご自分の目で確認して頂ければすぐに分かる事です」

僕はすぐにたばこ部屋を飛び出した。そして自分のデスクに向かう。僕のパソコンはまだ起動していなかった。

待っていられない。

僕は隣席の先輩保土ヶ谷さんにパソコンを貸してくれるよう頼んだ。

「よ、吉沢君……、か、構わないよ」

保土ヶ谷さんはしどろもどろになりながら僕に席を譲ってくれた。

「では、お借りします」

僕は社内連絡を食い入るように見つめる。

そこにはこう記載されていた。『以下の者を〇〇部××課の課長職に任命する。　吉沢伸介』

神木の言っていたことは事実だった。

僕は喜びよりもこの突発的な異動に困惑した。通常の人事異動は事前に内示が行われる。従って今回の内示すらない人事異動の発令は部署の異例と言わざるをえない。

何気に僕に対して周囲の視線は集中していることに気づいたが、敢えてそれを無視して社内連絡に注意を戻す。何でも九時から全社一斉放送で重大な発表があるらしい。

僕の昇進より大きな発表なのだろうか？　そもそも僕が〇〇部××課の課長に昇進したら丸尾の居場所が無くなってしまう。それでいて丸尾に関する異動の情報はどこにも記載されていなかった。

「保土ヶ谷さんありがとうございました」

「い、いえ」

(2) 昇進－3

僕は保土ヶ谷さんに礼を言ってパソコンを返した。ようやく起動した自分のパソコンで僕はもう一度じっくりと社内連絡の内容を確認した。丸尾の奴さては何か悪さをしてかしたのだろうか？しかし僕の心配は結果として杞憂に終わった。九時からの社内放送で次のことが告げられたからだ。

それはつまり、丸尾を代表取締役つまり社長に大抜擢するという連絡だった。

今の時刻は九時半だが社内放送はまだ続いている。スピーカーから執行役員と称する初老の男性の声が響いている。僕の周辺の社員は身近な丸尾課長の異例の二階級特進どころか最上級特進ということもあって、神妙な面持ちでその声に耳を傾けている。

「……、というわけです。我々は今回の大不況により会社創立来の未曾有の危機を迎えております。そこで我々は大きな決断を下すことにいたしました」

熱く語る執行役員の言葉に僕は改めて自分の会社の酷い状況を思い知らされた。

「この非常事態の打開策について役員会は三日三晩激論を交わしました。その結果、今日のこの人事異動発令に至ったのです。この後、臨時株主総会を開き今回の人事案について株主の皆様にご承認頂く予定です」

どうやら今回の抜擢は本当らしい。そして社内放送はなおも続く。

「私は思います、これほどのドramaticな環境変化の中において老兵を選んでいてはとても我が社を存続させる事は困難であると！先日逝去された先代の社長もこのようにおっしゃっておられました。『今後はもっと若い人を選ぶべきだ』と！」

僕は執行役員の言葉を聞くまで、先代の社長が亡くなっていることすら知らなかった。

「我々は若手の中から『反骨精神旺盛』で『なにくそ！』という気概を持ってこの困難な現状を打破できる人物を選抜しました！それが、この丸尾君……いや丸尾社長なのです！丸尾社長、さあこっちに来て挨拶をしてください！」

『ゴソゴソッ』とマイクを丸尾に向ける音が聞こえた。

「ええ、俺、いや私が丸尾琢巳です」

丸尾自身困惑している感が否めない。

「このたび社長に就任することになりました。ええっと……元々の部署は……」

しどろもどろになりながらも丸尾は自己紹介を続ける。そして元の部署について触れた時、僕を含む部署のみんなが一斉に息をのんだ。しかし……。

「丸尾社長ありがとうございました！」

その執行役員は丸尾の二の言葉を許さなかった。そしてどうやら既にマイクは執行役員へと切り替わってしまったらしい。これでは、僕達の部署が全社的に紹介されることもない。僕を含む部署のみんなはがっかりした。

「今回の人事異動発令は内示もかねております。従いまして丸尾社長はすみやかに課長職の引き継ぎを終えるようお願いします。以上です」

(2) 昇進ー4

社内放送は無事終了してしまった。これではまるで社長が役員に命令されているようだ。妙な違和感を感じたのは僕だけではないだろう。丸尾は午前中本社で社長職の説明を受けているらしく、部署には戻ってこなかった。

そういうわけで、僕は保土ヶ谷さんに自分の業務を引き継いで貰った。僕は午後になって引き継ぎに一段落付いたところを見計らい、たばこ部屋へ向かった。相変わらずたばこ部屋は閑散としていた。今日は丸尾の異動があったために部署自体慌ただしい。

そこへ再び神木がやってきた。

「吉沢さん、改めておめでとうございます」

「ああ、ありがとう」

「これからは吉沢課長ですね！」

「ははは、今まで通りの吉沢さんでいいよ」

神木は順当に引き継ぎが完了すれば僕の部下になるだろう。

「それにしても突然でしたよね」

無論神木の言っていることは僕のことではない。

「そうだね、まさかいきなり社長とは……」

「本当ですよね」

「実を言うと僕は自分のことより丸尾の異動にビックリしているんだよ」

「確かに異例の大抜擢ですからね」

「僕はあいつと先週の金曜日に一緒に飲みに行ったばかりなんだよ。だけどそんな素振りは微塵も見せなかっただけどなあ……」

「そうですか……」

神木は何かに納得したようにこう言った。

「丸尾さんは社長ですよ。おいそれとそんな情報を飲み屋では話せなかつたのでは？」

確かに神木の意見にも一理ある。

「そうなのかなあ」

「きっとそうですよ」

神木は僕を励ますようにそう言った。

「それにしても社長と飲み会ですよ。貴重な経験だと思います。今後は丸尾さんも『雲の上の人』ですからね」

「うーん、そうかもしれないね」

確かに神木の言うとおりかもしれない。

この際率直にこの自分の疑問を神木にぶつけることにした。

「ところでさ、神木に聞きたいことがあるんだよ」

「なんでしょうか？」

神木は二本目のたばこを取り出そうとしている。

(2) 昇進ー5

「僕はさ、一般的な人事異動の場合発令の前には内示があると思うんだよ。でも今回の件について言えば一切無かったよね」

「吉沢さん、今回は通常の人事異動ではありませんよ」

神木は僕を諭すように言った。

「これは未曾有の大不況を乗り切るべく会社の取った最後の手段なのです。通常のやり方ではこの異常な不況は乗り切れません」

それだけではどうにも僕は納得できない。

「まあ、それはそうかもしれないけどさ」

確かに僕にも今回の異動が普通ではないことくらい理解できる。しかしあまりに異常だ。異常すぎる。

「いいかい、僕に対しても課長昇進の内示はなかったんだよ？」

「そこから芋づる式に丸尾社長の件がメディアに知られることを警戒したのではないでしょうね？」

僕のような平社員が課長になる程度で丸尾の大抜擢が果たして漏れるものだろうか？ し難い顔をしている僕をしげしげとみつめながら神木は一服してこう言った。

「良いじゃないですか、吉沢さんは『課長』ですよ」

「まあ、そうかもしれないけれど……」

「素直に喜びましょうよ、吉沢課長」

たしかに神木の言うとおり今回の課長昇進は僕にとって『棚ぼた』だ。しかし同期の丸尾が社長に大抜擢されて一方の自分は課長では少々納得いかない。

「なんだかあまり嬉しそうではないですね？」

「うーん、僕も出来れば『雲の上の人』になりたかったよ」

無論課長の丸尾が社長に抜擢されるより普通の平社員が社長に抜擢される方が遙かにあり得ない。分ってはいるけれど、同期の出世という者はねたましいものだ。そんな狭量な僕に神木はこう諭してくれた。

「そうですか？ 僕は『社長』なんてまっぴらゴメンですよ」

「どうしてだい？」

「酷く大変そうじゃないですか？」

「僕はやりがいがあると思うけれどね」

実際は肩書きが羨ましいだけだ。

「僕ごときには社長の大変さなど到底理解できませんよ、そもそも『社長』が一体どんな仕事をするのか見当も付きません」

「僕だって知らないさ」

どうせソリティアでもして遊んでいるのだろう。そんな邪推をしていると神木の視線が僕のネクタイに止った。

(2) 昇進－6

「お、吉沢さんネクタイ曲がってますよ」

「ん？ そうか」

僕は自分の身だしなみに無頓着なので、服装コーディネイトはすべて嫁の聰美に任せている。今朝は本当に遅刻間際だったので、適当にネクタイを首に巻き付けて出社した。

神木は僕のネクタイを訂正してくれた。

「すまないね、気を遣って貰って」

「いえ、気になさらないでください。そういえば……」

神木はジャケットからネクタイピンを取り出して僕のネクタイがゆがまないように留めてくれた。

「ええ、これで大丈夫です。吉沢さん」

「このネクタイピンは？」

「ええ、それはただのもらい物です」

「それにしては随分高級な代物っぽいけれど」

僕は自分の胸元にしっかりと止められた銀色のネクタイピンについて神木に尋ねた。すると神木はアッサリとこういった。

「よろしければ、貰って頂けませんか？」

「ん？ どうしたの、これ？」

神木は少し困った顔になる。

「実は少し前に彼女に貰ったモノでしたが、別れてしまいまして。捨てようかとも思ったのですが、結構高価なモノらしいので捨てるに捨てられず難儀していたのです」

「モノを大事にするという心がけは立派だと思うよ」

「ありがとうございます。もらい物で恐縮ですが、それは私からのお祝いとして受け取って頂けませんか？」

後輩の神木がせっかくくれるというのなら僕にそれを拒む理由もない。それにこのネクタイピンはいぶし銀の渋い感じが非常にかっこいい。

「ありがとうございます。遠慮無く使わせてもらうよ」

「嬉しいです、ありがとうございます」

僕としては後輩に神木のような好青年が付いてくれるというだけで十分だ。

「吉沢課長はこれから大変ですよ」

「そうだね、まずは丸尾元課長の仕事の引き継ぎからだね」

「そうだ、僕は今後課長として頑張っていかねばならない。」

「ええ。丸尾課長は大型案件を三つも抱えてましたから、普通の人には難しいですよ」

「へえ、あいつそんなに仕事の出来る男だったんだ」

これは本当に意外だ。本当に仕事をしていたんだ。

「ええ。僕は尊敬していますよ、丸尾社長を！」

(2) 昇進ー7

神木は本当に丸尾を好いていたんだなあ。

「ところでそんな仕事をたった半日で引き継げるものなのかなあ？」

いきなり、無茶な仕事を押しつけられてもやっていける自信が僕にはない。僕は急に不安に襲われた。

「大丈夫ですよ。きっと吉沢課長なら無難に成し遂げますよ」

「だといいけれどね」

「僕も精一杯お手伝いさせて頂きます」

「よろしくお願ひするよ」

結局僕はタバコを三本吸って、神木と一緒にタバコ部屋を後にした。

タバコ部屋から自分のデスクに戻ると周囲の雰囲気がピリピリしているように感じられた。何事かと思えば、僕の席にはくたびれた顔の丸尾が座っていた。

本来大抜擢を受けた『時の人』だからこそ、周囲に人が群がっても良さそうなものだが、丸尾は見るからに疲労困憊している。あからさまに不機嫌オーラを発している。そうはいっても、丸尾が座っている席は僕の席なのだ。僕は丸尾に声を掛けざるをえない。

職場の連中は自分の業務に集中しているフリをしながら固唾をのんで僕と丸尾の様子を見守っているようだ。

「ま、丸尾社長。戻っていらっしゃったのですね」

いかにも今気がついたかのような素振りで僕は丸尾に声を掛ける。

もちろん、丸尾の肩書きが大きく変わったという事で僕も自然と敬語で話しかけざるを得ない。しかし丸尾はそんな事には一向に関心がないようだった。

「ああ、今さっき記者会見から戻ってきたばかりだ」

丸尾は席から立ち上がるとそう言った。どうやら丸尾はあの社内放送の後、メディア向けへの記者会見にも出席したらしい。

「僕にご用ですか？」

「ああ、俺はお前を待っていた」

おそらく課長職の引き継ぎだろう。

「吉沢、ちょっと会議室……、いや一階の応接室に来てくれるか？」

僕も聞きたいことが腐るほどある。

「畏まりました」

僕の返事を待って丸尾は歩き始めた。僕もその後を追う。エレベータ前まで来て気づいたが、丸尾の三歩後ろには今まで見たこともない黒いスーツを着た男が三人付いている。必然的にエレベータの籠には僕と丸尾の他にその三人も入る。

「どなたですか。この方々は？」

(2) 昇進－8

「うん？ ああ、こいつらはＳＰだ。気にする必要はない」

「ＳＰ？」

「ああ、細かい話は応接室へ着いてからにしよう」

「はい」

丸尾は黒いスーツの男達に外で待つように指示を出して、応接室へ入っていった。

何となく僕は直ぐに応接室へ入って良いものか考えてしまった。

「吉沢！ さっさと入れ」

「はい」

僕は急いで応接室へ入った。

「適当な席に座ってくれ」

入り口の隣に立ったまま丸尾はそう言った。

「はい」

僕は入り口に近いソファに腰を下ろした。僕がソファに腰を下ろすのを見計らって丸尾はガチャリと扉に施錠した。僕は一瞬ギョッと振り返る。

しかし丸尾はさっさと応接室の真ん中に移動すると、空いてるソファに倒れ込んだ。そして、はき出すようにこう言った。

「おう！ マジで疲れたぜ」

「社長？」

すっかり素に戻った様子の丸尾を見て僕は驚いた。

「おい、吉沢。ここには二人しかいないんだ。だから敬語はなしだ」

社長になっても丸尾はやはり丸尾だった。

丸尾がそういうのだから僕も余計な気を遣う事をやめた。

「ああ、分かったよ」

僕は相変わらずソファに寝転がっている丸尾の様を眺める。金曜日に飲んだ丸尾と何も変わっていない。聞きたいことは色々あったけれど、まだ自分の中で整理しきれずにいたので取り敢えず社長になった感想から尋ねることにした。

「で、どうだい？ 社長になって」

「どうもこうもあるかよ！ あり得ねぇよ！」

「ＳＰを三人も引き連れてかっこいいじゃないか」

今も応接室の前に黒いスーツの男が三人待機しているはずだ。

「馬鹿野郎！ あいつら、俺がウ〇コの時まで付いて来やがるんだぜ！ 堪らんぞ！」

「何だか早速苦労しているみたいだね」

「どっちかっつうと気苦労だな」

「気苦労ねえ」

(2) 昇進ー9

そのくらいの苦労と引き替えに得た肩書きなら安いものだ。そんな事よりも僕は明日から丸尾の業務を引き継がなければならない。丸尾から今のうちに出来る限り引き継ぎを受けなければ……。

「お疲れのところ申し訳ないんだけれど、仕事の引き継ぎの話もしたいんだよ」

「ああ、それね。適当にやってくれ」

「ええ？」

存外の無茶ぶりに僕は困惑した。丸尾はそんな僕を安心させるようにこう付け加えた。

「全社レベルで見れば小さな案件の二、三だろう。失敗しても大した影響は無いさ」

「いやいや、僕が困るよ！」

引き継ぎもなく業務が遂行できるとはとても思えない。

「心配するな。俺が社長でいる限り何があってもお前の身の上は保証してやるぜ」

「おいおい、本当に信用して良いのかい？」

「ああ、マジで心配するな。何なら俺に万一の事があったらお前を……そうだな、お前を昇進させるように遺言を残しておくぜ」

「なんだか物騒だな、丸尾社長は命でも狙われているのかい？」

「どうなんだろうな。詳しくは知らんがＳＰ三人も付けてくれてるしな、俺自身は安全だと思ってる。外の『ＳＰ』連中見たら分かるだろう？」

「それはそうだね」

「そんな事より、吉沢、お前をそのうち副社長にしてやろうと思ってるんだぜ」

それはムチャクチャだ。人事権の濫用にも程がある。

「いやいや、お前、そんな大事を簡単に決められないだろう」

「がっはっは、お前は社長の人事権を侮ってるな？」

「話半分に聞いておくよ」

「はいはい」

「ぶっちゃけちまうとよ、俺は自分の気苦労を親しい人間と分かち合いたいだけなんだけどな」

「なんだよ、それ？」

「何せ、いきなりの社長職でこちとら戸惑いっぱなしだしな」

丸尾らしからぬ弱気な発言だ。

「吊り橋もみんなで渡れば怖くないっていうだろ？」

「いや、言わないよ。そもそも吊り橋はみんなで渡るものじゃないしね」

「そだっけ？　がっはっは」

冗談かどうか僕には判断しかねた。

くだらない雑談に一息つけると、丸尾は体を起こしてソファに座りなおした。そして真面目な顔で僕に向かってこう言った。

(2) 昇進ー10

「俺さ、明日から『社長業務』が始めるんだぜ。昨日まで『課長』だった俺がだぜ？」

僕は丸尾に向かってこう言い返してやった。

「僕は明日から『前課長の残業務』が始まるんだよ。昨日まで『平社員』だった僕がだよ」

「おい。吉沢よう、茶化すな」

拗ねたように丸尾は応えたが、さすがにいい年したおっさんなので可愛くもない。

「僕は別に茶化していないよ、事実を述べたまでだ」

「ところで、先週僕と二人で一緒に飲んだときに今回の昇進の件は聞いていたのかい？」

ずっと気になっていた事だ。

「いや、これっぽちも聞いてない」

「じゃあ、いつ聞いたんだい？」

「日曜の、だから昨日の夜八時頃だな、正直最初は悪戯電話だと思ったよ」

「それはそうだろうね」

仮に僕が丸尾の立場だったとしても、突然そんな連絡があれば悪戯を疑うだろう。

「じゃあ、どうして信用したんだい？」

「相手が俺の社員番号からやってる業務内容まですべて把握していたからさ」

なるほど、それは信じざるを得ないな。

「なら、社長を引き受けた理由は？」

「ん？」

「お前社長職に否定的だったじゃないか？」

「そりゃお前、会社の決めた事には逆らえないのさ」

「ふーん、そういうモノなのか」

僕はてっきり丸尾なら断りかねないと思っていたけれど。

「ところでよ、吉沢は俺がどんな仕事すると思う？」

「ええ？ 丸尾、君はあの執行役員から何も聞いてないのかい？」

僕は丸尾の質問に少々驚いた。

「ああ、何にも聞いてない。ちなみにあの執行役員の名前は『神木』さんなんだぜ」

「ひょっとして丸尾の部下の……いや元部下の神木君のお父さんかい？」

「残念！ 僕もそう思ったんだけど、赤の他人だ。そもそも漢字が違うしな。それに神木執行役員は独身だそうだ」

「いやあ、分からぬよ。騙されてるんじゃないの？」

「いやいや、顔も全然似てないから間違いない。血統書付きの他人だぜ」

まあ同じ読み方の姓を持つ人間なんて日本中腐るほどいるだろう。

「ふーん、まあいいや。それにしても神木執行役員はまるで声優さんのように良い声をしてるね」

(2) 昇進ー11

「ああ、実際かなりダンディな紳士だった。あれなら役者やつても大成すると思うぜ」

「で、丸尾が明日何をするかだよね？」

「ああ、一体何するんだろうな？ 社長の俺は？」

「うーん、ふんぞり返って新聞でも読んでればいいんじゃないの？」

僕は社長の仕事に興味などない。

「吉沢もやっぱりそう思うのか？」

丸尾は僕の適当な応えに対して不服そうだ。

「僕はそう思うけど？」

「だと良いけどよ」

「何か心配事でもあるのかい」

「前の社長は死んでるんだぜ？」

「そういえばそうだった。だからといって社長になれば死ぬと決まったわけではない。

「俺は普通に働きたいぜ。目標はそうだな、あの神木くらいかな」

「執行役員の神木さんかい？」

「違うぞ、元部下の神木の方だ。あいつなら社長と同じだけ給料を貰っても良いと俺は思ってるけどな」

「神木君はそんなに優秀なんだね」

「ああ、あいつが側にいれば安泰だ。俺が課長になれたのもあいつが下に付いてくれたおかげだ。あいつをお前の側に残してやる俺に感謝しろよ」

「そうだね。感謝するよ」

「いずれにせよ、明日以降だな」

丸尾は携帯電話で時刻を確認した。

「おっと、そろそろ本社に戻る時刻だ」

「そうか、社長は忙しいんだな」

「引き継ぎらしい引き継ぎが出来なくて申し訳なかったな、吉沢」

「僕は丸尾に携帯メールで連絡しても大丈夫なのかい？」

「おう、全然してくれ。また飲みに行こうぜ……、もっとも明日以降の業務次第だけどな」

社長になっても変わらない丸尾に僕は少しホッとした。

「それを聞いて安心したよ。丸尾社長さん」

僕の言葉に丸尾は気さくに笑って返した。

(3) 課長ー1

僕はこの日定時に退社した。結局業務の引き継ぎらしい引き継ぎは一切して貰えなかつたが、神木が事実上仕事を担ってくれているという話を聞けた事は唯一にして最大の収穫だつた。

昇進の喜びと僅かながらに感じる丸尾への嫉妬。

僕は相反するこの二つの感情を複雑に感じながら帰宅した。

僕がアパートのドアを開けた。

「！」

すると唐突に嫁の聰美が抱きついてきた。

「おめでとう！ 伸ちゃん」

「ありがとう、ってどうして知ってるんだよ？」

吉沢はまだ昇進の件を聰美に報告していなかつた。

「会社からもお祝いの電話があつたのよ」

僕の首に手を回したまま聰美は耳元でそう囁いた。

しかしふと疑問が生じた。わざわざ会社が昇進の連絡をだらうか。

僕は率直にその疑問を口にする。

「どうして会社がそんな連絡してくるんだ？」

「さあ？ 丸尾君がそういう指示でも出したんじやないかしら」

「へえ、じゃあ聰美は丸尾の昇進の件も知ってるんだね？」

「ええ、もちろんよ」

同期の丸尾が社長へ出世して自分は課長では僕としても立つ瀬がない。そんな僕の切ない気持ちを知ってか知らずか、聰美はこう言った。

「本当にラッキーよね」

「ラッキー？」

「そうよ、あなたはラッキーなのよ」

聰美は丸尾の出世を単なる幸運だと考えているらしい。実際のところ僕も聰美の考え方と同じだ。そもそも同期入社の人間の実力にそれ程大きな差があるとは思えない。

「まあ、そうだね」

僕は素直にそう答えた

「あなたは自分がどれほど幸運の持ち主なのか理解していないのよ」

「どういうことだよ？」

聰美は諭すようにこう言った。

「だって友達が社長って事はあなたの昇進は確実じゃないの！」

なるほど、そういう解釈もあるのかと僕は思った。事実丸尾から副社長ポストの話を聞かされている。僕自身は話半分に聞いていたが、案外聰美の言うように世の中捨てたモノではないのかもしれない。

(3) 課長ー2

僕は優しく聰美の腕をほどいて「だといいけどね」とだけ言い残してリビングへ向かった。過剰な期待をさせて也可哀想だ。

そして当の聰美は鼻歌交じりで台所へ戻っていく。振り返って微笑みながらこう言った。
「今夜はお祝いね」

翌日、僕はいつもより少し早めに出勤した。

どうしてかと言われば理由はない。

課長に昇進したから何となく気合いが入ったのだろう。自分の事ながら他人事のようだが。

時間を少しずらすだけで随分と電車の中は空いていた。無論座れるほどではないが、押しから饅頭するほどではない。

僕は会社のビルに辿り着くといつものように警備員に挨拶する。

「おはよう」

「おはようございます！」

警備員の態度は明確に違った。

さては昨日丸尾と一緒にいるところを目撃したのかもしれない。現金なものだ。僕にこびたところで何のメリットもないというのに。

僕は昨日と同様にエレベータに乗り七階のボタンを押す。

これまた昨日と違って、時間をずらしただけで随分と人が少ない。なるほど早起きは三文の得とはよく言ったものだ。明日以降もこの時間帯に出社するように心がけよう。

七階でエレベータを降りると、僕は真っ直ぐに自分のデスクへ向かった。

しかし、自分のデスクの前で呆然としてしまった。

昨日まで自分のデスクのあった場所にはプリンターが置かれていたからだ。誰かの嫌がらせだろうか？ 周囲を見渡すと僕の机の上にあった私物はすべて隣の課の丸尾のデスクの上に移動されていた。誰の指示だろう？

「おはようございます」

朝から困った顔をしているであろう僕に背後から誰かが声を掛けてきた。僕は振り返ってその人物を確認する。

「ああ、神木君か」

神木は今朝もさわやかな笑顔で僕を迎えてくれた。僕は神木にこのデスクの引っ越しを尋ねる事にした。

「これは、誰がやったのかな？」

「大変失礼しました。僕の独断で今朝、荷物を移動させて頂きました」

今朝ということは僕が来るよりもずっと早い時間に出社してこんなくだらない作業をしてくれたということか。丸尾の言った以上にこの青年は優秀なのかもしれない。

(3) 課長ー3

「ありがとう。本当に助かったよ」

僕は素直に礼を言った。すると神木は僕に向かって改めて挨拶をした。今度は朝の挨拶ではない。

「いえ、これからはご指導、ご鞭撻の程よろしくお願ひいたします」

新しい部下としての挨拶だった。

「こちらこそよろしく頼むよ」

僕は改めて気を引き締めた。

たばこ部屋を出た後、取り急ぎ丸尾の残していった残作業の整理に着手した。しかし着手したまでは良かったが、丸尾の業務は殆どが資料として残されておらず結果として大いに神木の助力に頼ることになった。

そして丸尾が手を出していた業務の範囲は想像以上に広く深かった。このペースで行くと僕がある程度業務をこなせるようになるにはまだしばらく時間を要しそうだ。僕は業務に一区切り付いたところで再びたばこ部屋へ向かった。

タバコ部屋で僕は背筋を伸ばす。

「うーん、疲れた」

「ご苦労様です」

別に誘ったわけでもないのに、何気なく僕の衣服に神木も付き合ってくれた。本当にこいつは心底頼りになる部下だ。

「いや、今日は神木君のおかげで随分助かったよ」

僕は素直に神木に礼を言った。

「いえ、滅相もありません」

神木はあたかもそれが当然の事であるかのようにそう言って微笑んだ。

それにしても丸尾の奴はどうやってこれほどハードな業務をこなしていたのだろう。

「うーん」

「どうされたのですか？」

神木になら言っても構わないだろう。

「少し自信がなくなってきたんだよ」

「どうしてですか？」

神木は不思議そうに小首をかしげた。

「前任者の丸尾程僕は仕事をこなせるのかなってさ……」

「大丈夫ですよ、初めはみんなゆっくりです。間違い有りません」

部下に慰められてしまった。

思わず僕は苦笑。

(3) 課長ー4

「それにしても丸尾は凄いよ、あいつの立場になって再認識したよ」

「全くです。僕は丸尾先輩にだけは頭が上がりません」

そんな僕は神木に頭が上がらない。それにしても丸尾と比較されたらどうしようか。僕にはまるで勝てる要素が無さそうだ。

しかし僕の不安は杞憂に終わった。神木は話題をがらりと変えてきたからだ。

「ところで吉沢さん、昨日僕が差し上げたネクタイピンはお気に召しましたか？」

「え？」

僕自身、神木に指摘されるまで貰ったネクタイピンを付けていないことに気づかなかった。そういうえば今朝聰美はネクタイピンを用意してくれていなかったように思う。どうしてだろう？

ひょっとして聰美は気に入らなかったのだろうか。僕はさし当たって神木が気を悪くしないように適当に言い訳をしておくことにした。

「ああ、申し訳ない。今朝はあたふたしていて忘れていたよ」

今日家に帰ったら聰美に確認しておこう。神木には今後も世話になるのだからこんな詰まらない事で関係を悪くしたくはない。

「本当に申し訳ないね」

「いえ、お気になさらないでください。ただお似合いでしたので……」

神木が残念そうにそう言った。

「そう言って貰うと益々申し訳ないね。高そうなモノだし何なら返そうか？」

「いえ、一度差し上げた物ですので、吉沢さんのお好きなようになさってください」

神木は別段気を悪くした様子もなくそう言って微笑んだ。

結局僕はこの後たばこ部屋を出て終電になるまで働いた。帰った頃には既に聰美は休んでいた。ネクタイピンの件は翌朝確認する事にして、僕も休んだ。

翌朝、聰美に起こされても僕は目が覚めなかった。そのくらい一日目の業務で疲れていたのだろう。三回起こされてようやく重たい目を開いた僕はパジャマのままでダイニングへ向かった。

「おはよう、やっと起きてくれたわね」

「すまない。昨日遅かったからね。疲れていたんだよ」

「いいのよ。課長様だものね」

「はは……」

そう言わると悪い気はしない。

「昨日は聞きそびれちゃったけど、課長になった気分はどう？」

(3) 課長ー5

「そうだね、はっきり言って疲れたよ」

「でも、丸尾君の仕事を引き継いだだけよね？」

聰美のこの言葉にさすがに僕も少しいラッとした。聰美は僕の仕事の一体何を知っているというのだろう？ 僕がどれだけ苦労しているのかも知らずに……。

僕がムスッとした顔でテーブルに置かれた牛乳で焼きたてのトーストを胃袋に流し込む。

僕の気分を知って知らずか聰美は僕のワイシャツを用意をしながらこんなことを尋ねてきた。

「初めて出来的部下はどうなの？」

最初に出来的部下は神木か。

神木といえばネクタイピンのことを忘れるところだった。朝食を食べ終えた僕はスーツに着替えながら神木からの小粋なプレゼントについて聰美に尋ねる。

「なあ、聰美」

「なあに？」

僕の脱いだパジャマをたたむ聰美。

「一昨日ネクタイピン付けて帰ってきたと思うんだけど、それ、知らないかい？」

僕の質問に聰美は一瞬びくりと反応したが、あっさりこう返事した。

「えっと、アレ捨てちゃった」

「ええ？」

驚くほか無い。

神木からの贈り物なのに、あんまりだ。

「うん、捨てちゃったのよ」

聰美はもう一度同じ事を繰り返した。

さすがの僕も黙っていられない。

「あれ、もらい物だぞ！ 大切な後輩からの！」

「だから捨てちゃったのよ、ゴメンね」

聰美は同じセリフを繰り返し、簡単に謝った。本音を言えばもっと聰美を怒鳴りつけてやりたいところだが、僕は聰美に頭が上がらない。これ以上この件について聰美を責めてもナンセンスだ。僕は渋々ネクタイピンを諦めることにした。

「まあ、仕方ないな。やっちゃったモノは……」

「本当にゴメンね」

申し訳なさそうに聰美は謝った。

僕はそんな聰美が愛おしくて仕方がない。惚れた者負けと言うことだろう。

「いや、もういいよ」

僕はそう言ってこの話を終いにした。

(3) 課長ー6

「行ってくるよ」

「行ってらっしゃい！」

仲直りの意味もかねて軽く頬にキスをしてもらい、僕は出勤した。

この件については神木に黙っておいた方が良いだろう。しかし出社した後、神木がネクタイピンについて尋ねてくることはなかった。気を悪くしていなければよいけれど。

課長になった火曜日から週末の金曜日までの間僕は多忙を極めた。入社してこれほど多忙な経験をしたことではない。出来ることなら丸尾に訊きたい事が山積しているが、さすがに社長へ課長業務の質問をする事は憚られた。

もっとも実際のところ課の業務の大半は神木がこなしているようだった。神木の有能さについては部署のお墨付き、というより社長の丸尾が認めている以上、会社のお墨付きだ。神木は嫌な顔一つ見せず、まさに忠犬のように課のために、つまり僕のために尽くしてくれた。僕の中では神木的好感度は最大値だ。

金曜日の夕方にもなるとさすがに僕も仕事の内容をおおよそ把握する事が出来た。僕はある程度キリが良い頃だと判断して丸尾の携帯電話にメールを打つことにした。

もちろん相手は同期といえど社長なので、返信の期待はしていない。だからメールの本文は次のような簡単な内容にした。

・タイトル『どうですか？』

・本文『無事に社長業務をこなせていますか？ 暇が出来たら飲みに行きましょう。では』
うん、我ながら無難なメールだ。

「送信っと」

僕は『送信完了』の表示を確認して家路についた。

丁度僕がアパートの玄関前に辿り着いた時、僕の携帯電話が鳴った。モニタを確認すると『非通知』と表示されている。僕の知り合いに非通知設定で電話を掛けてくる奴はない。

結局あまりにしつこいので電話に出てやることにした。

「もしもし？」

「丸尾だ。お前は吉沢か？」

発信者は丸尾だった。さっきメールしたばかりで早くも連絡をくれるなんてなかなか友達甲斐のある奴だ。僕は丸尾を見直した。

「ああ、そうだよ。一週間ぶりだね」

「頼むぜ、直ぐに出てくれよ」

「非通知で掛かってきたから、怪しい人からの電話かと思ったんだよ」

「それはすまなかつたな」

(3) 課長ー7

どうも丸尾らしくない返事だ。いつもなら豪快に「がはは」とか笑って返すはずなのに少々様子がおかしい。

「ところで、君は元気に社長業務やってるのかい？」

「まあ、な。多分」

どうにもはっきりしない口ぶりだ。

「吉沢、そっちはどうなんだ？」

「どうにか今週を乗り切ることが出来たって感じかな」

「そうか、そいつは良かった」

やはり丸尾らしくない。

「ところで丸尾は一体どんな社長業務をこなしているんだい？ まさか本当にソリティアに励んでいる訳じゃないよね？」

「悪い。守秘義務だから言えないんだ、マジですまん」

「守秘義務？」

僕は守秘義務というキーワードを聞いて、辺りを見回した。うん、特に誰もいない。

「大丈夫だよ、丸尾。周りには誰もいない」

「そうか、なら良いんだ」

「というか、僕との会話でそんな大それた話しないだろ？」

「いいか、吉沢。たとえば社長様のたわいない一言が株価に影響を与えるんだ。だから原則一切合切が守秘義務の対象となっているんだよ」

なるほど、らしくない口ぶりの原因はそれか。

「まあ何にしても丸尾社長も色々大変なんだなあ」

「いや、正直うちの会社の社長職は大変なんてものじゃない。ヤバイ」

「へえ、激務なんだ」

「まあ、そう言えるかもしれない」

相変わらず歯切れは良くないが、『雲の上の人』の感想なんてそうそう聞けるモノじゃない。

「ところで丸尾は今も本社なのかい？」

「いいや。違う、うーん、言っても良いのか。俺は今は熊本辺りだ」

丸尾の言葉に反応するかのように『サーバー』と携帯電話に耳障りなノイズが乗った。

「すまんな、今社長専用の携帯電話使っているんだ。少し旧式らしくてノイズが乗るらしい」

「そうなんだ。大丈夫だよ、声は届いてるから」

「そうか、なら良いんだ」

丸尾は心配そうにそう呟いた。

(3) 課長ー8

「でも暖かいところで羨ましいねえ、こっちは相変わらず真冬だよ」

「暖かいどころか……ザーザー」

再びノイズが乗る。そのノイズを合図にしたかのように丸尾はこう言いだした。

「吉沢、お前にお願いがあるんだ」

「なんだい？ 社長様の命令とあればなんなりと」

「茶化さないで聞いて欲しい……ガーガー」

丸尾の言葉に反応するかのように再び音声に強いノイズが乗った。きっと丸尾のいる場所は電波の掴みが良くない所なのだろう。

「まあ、なんだかよく分からぬいけれど力になるよ。友達だしね」

「そうか。じゃあ、——」

ツツリッ！

突然丸尾の携帯電話は唐突に切れた。そしてそれっきりだった。

リダイアルしようにも非通知なので相手の発信元番号は不明だ。

仕方なく僕は私用携帯の方へメールで『また連絡をください』と送った。僕はしばらくの間アパートの前で携帯電話とにらめっこをしていた。しかし一〇分待っても何の応答も無いので諦めて携帯を鞄にしまった。そして普段通り聰美の待つアパートの扉を開けた。

(4) コンタクトー1

僕が課長に昇進して二週間が経ったある日の午後、ビルの受付から僕宛に連絡があった。

「吉沢課長ですか？」

「ええ」

「受付ですが、吉沢さんに面会したいという方がいらしています」

今日はそんな約束をしていない。そもそも会社の人間であれば普通に通せば良いだけの話だ。どうしてワザワザ僕に連絡をして確認する必要があるのだろう。僕は尋ねる。

「どなたですか？」

しどろもどろになりながら警備員は応えた。

「えっと……」

僕にとってそれは意外な人物だった。僕は直ぐさま受付にその人物を応接室へ通すよう指示した。

僕はネクタイを締め直して応接室へ向かうと、既にその来訪者はソファにどしりと座りくつろいでいた。その来訪者は僕にとっては初対面の人間だった。だが知らない人間ではない。いや、それどころかよく知っている人物だった。

応接室には僕と来訪者の二人きりだ。

来訪者は僕が部屋へ入るのを見計らってこう言った。

「取り敢えず座りたまえ」

「はい」

僕は軽く一礼してその人物の真正面に腰を下ろした。

「君が吉沢伸介君だね」

来訪者は改めて僕の氏名を確認した。

「え、ええ、そうです」

僕はしどろもどろになりながら何とか回答した。

すると、来訪者は自らの名前を改めて僕に告げた。

「私の名前は神木だ」

「ええ、お名前は良く存知上げております」

「それは光栄だ。ご存知のとおり私は一応会社から執行役員という肩書きを借りている」

神木執行役員は校内放送で聞いたとおりのよく通る良い声をしていた。神木は十分な量の白髪に柔軟な笑顔がよく似合うナイスミドルだった。

しかし、僕には神木がどんな要件でわざわざ本社からこの雑居ビルまで足を伸ばしたのか皆目見当も付かなかった。そんな僕の腹の内を見透かしたかのように神木はこう言った。

「今日私は君に伝えなければならないことがあって、ここに来た次第だ」

「はあ」

「実は次の社長は君に決まった」

(4) コンタクトー2

「はあ？」

突然この人物は何を言っているのだろう？

それが僕の率直な感想だった。

しかし当惑する僕を神木はまるで意に介さず様子はない。

「これは内示だ。会社の決定事項だから、君の意思は関係ない」

「はあ」

とりあえず僕はにわか返事をする。

「これは前社長のご意志……いやご遺志を踏まえたモノだ」

神木はにこやかな笑みを浮かべたが、僕にはそれが少し気味悪く感じられた。

「よく聞きたまえ、吉沢君。先日先代の丸尾社長は失踪されたのだ」

「ええ！？」

神木の言葉に僕は声を上げて驚いた。確かに丸尾とはこの一週間連絡が取れない状況が続いている。何せ彼の携帯電話に連絡をしても奴は電話に出ない、それにメールの返事もない。僕はてっきり丸尾が多忙を極めているからだとばかり考えていた。

神木は丸尾の失踪についてこう補足した。

「私の訊いている限りでは、一週間ほど前に開催された熊本での打ち合わせがあつたらしい。その後、北海道への出張の予定があったそうなのだが、その間に失踪されたらしい」

あの丸尾が失踪なんて信じられない。

「僕はあいつと……いえ、熊本にいる丸尾社長と携帯電話で会話しています。もしかすると何かの事故に巻き込まれたのかもしれません、だから……」

「だから何かね？」

僕は『だから』の後の言葉を探す。

しかし直ぐには適当な言葉が見つからなかった。

神木はソファに座り直し、険しい顔つきでこう言った。

「いいかね、吉沢君。私の目的は君に社長昇進の内々示を伝えに来ただけだ。社長の失踪に関しては、私の知る限りではないのだ。今は亡き社長のご遺志を継ぐ事が残された我々の義務ではないかな？」

「まるで丸尾が死んでいるかのような口ぶりですね」

「吉沢君、大の大人が一週間以上も連絡が取れない状況が続いているのだよ」

「……」

「会社としては最悪の事態を想定して当然だろう？」

神木の言う事はもっともだ。しかし――。

「警察には連絡しているんですか？ ニュースにもなってませんよね」

僕の問いかけに対して神木は冷淡に回答した。

「何度も言わせないでくれたまえ、私の知る限りではないのだよ、吉沢君」

(4) コンタクトー3

「神木さん、丸尾の命に関わることかもしれないですよ！」

「いいかね、吉沢君よく聞きたまえ」

神木執行役員は僕に顔を近づけるとドスを効かせてこう言った。

「丸尾前社長は、我々の期待に添えず失踪されてしまったのだ」

「し、しかし……」

「聞きたまえ、吉沢君！」

神木は一喝した。

僕と神木の二人しかいない応接室に神木の声が響き渡る。

「丸尾社長の安否についてはご家族にお任せしている。警察に届けでないことも彼のご家族なりのご判断があつてのことだろう」

「そ、それにしても……」

神木執行役員は続ける。

「会社としては、彼のポジションを代表取締役兼最高執行責任者からただの最高執行責任者に異動させて頂くことにした」

社長と最高執行責任者の何が違うのか僕にはさっぱり分からぬ。

「すみません、ちょっと僕はその一一役職名について疎いもので……」

「いいかね、君が明日を担う代表取締役兼最高執行責任者だ！」

「は、はい」

結局、僕は神木に気圧され丸め込まれてしまった。

「明日の一八時に本社へ来たまえ。一階のロビーで待っているよ」

「承知しました」

神木は僕の返事を聞くと満足そうに応接室を立ち去った。

僕は今し方受けた内内示についてぼんやり考えながら自分のデスクに戻った。あの丸尾がまさかの失踪するとは。そして僕が次期社長？ 先週の丸尾はそのことを僕に伝えたかったのだろうか。僕の頭の中は混乱した。だから例の如くたばこ部屋で考えることにした。

僕がタバコ部屋へ入ると丁度神木が休憩していた。本当は内内示を他の人間に相談しては不味いのかもしれないが、今の僕には誰かに相談せずにはいられなかった。結局、僕は藁にもすがる思いで神木に相談する事にした。

「神木君、少し相談に乗ってくれるかい？」

「ええ構いませんよ」

神木は二つ返事で快諾してくれた。

「実は僕は先日課長に昇進したばかりなのに、早くも次の人事異動の内々示をうけたんだよ」

(4) コンタクトー4

「へえ、本当に異例の早さの昇進ですね、さすがは丸尾社長の見込んだ男だけの事はありますね。で、役職は何ですか？ 部長ですか？」

神木の質問に対する回答に少し時間を要したモノの僕は正直にそれを伝えることにした。

「実は社長らしいんだよ」

「ええ？」

さすがの神木も驚いたらしい。

「冗談じゃないんですか？ 二週間前に社長の交代があったばかりじゃないですか？」

僕は丸尾の失踪について他言して良いモノかどうか考えあぐねたが、結局神木を信用して現状を打ち明ける事にした。

「実は、丸尾は失踪したらしいんだよ」

「はあ、失踪ですか？」

神木はピント来ないらしい。もちろん僕だって同じだ。

「丸尾が失踪する前に遺言で残していたらしいんだよ、僕は社長になるよう遺言を……」

「うーむ」

しばらく神木は唸って考えこんでしまった。

「神木君はどう思うかな？」

「それって『棚ぼた』出世じゃないですか？ 僕はそう思いますよ」

神木の言う事はもっともだけれど、僕としてはどうにも釈然としない。『棚ぼた』にも限度というモノがあるだろう。

「吉沢さんは難しく考えすぎなんですよ」

「そうかな？」

「そうですよ、素直に喜びましょうよ」

神木がそう言ってくれると僕も多少気が楽になる。

「僕が社長になったら、君は僕の側に使ってくれるかい？」

「もちろんです、吉沢さんが本当に社長になればどこまでもついて行きますよ！」

「ありがとう、心強い限りだよ」

僕は神木に礼を言ってタバコ部屋を出た。少し気が楽になったけれど僕は相変わらず気が重い。原因は分っている。課長という役職ですら僕のキャパをオーバーしているのに果たして社長という職務など務まるのか。そして失踪してしまった丸尾の件も気に掛かる。

この件は嫁の聰美にも報告する必要があるだろうが、電話やメールではとてもうまく説明できそうに無かった。僕はアパートで直接打ち明けるつもりだ。

(4) コンタクトー5

退社後、僕は真っ直ぐアパートへ帰った。アパートの部屋の明かりは消えていた。

「買い物にでも出かけているんだろうか？」

僕は靴を脱いで居間へ向かう。

「ただいま」

僕は誰もいない部屋に向かって帰宅の報告をする。本当に誰もいないらしい。リビングへ入るとテーブルの上に書き置きがある事に気づいた。

『急用が出来たので実家へ帰ります。明後日には戻ります。聰美』

紙に書かれたメモを見て僕はため息が溢れた。聰美と結婚してからたまにこういう事があった。聰美的実家はこのアパートから多少距離がある。僕は人を束縛するタイプではないから、結婚以来聰美を自由にしてきた。しかし、今日ほどそれを後悔した日はない。

「はあ……」

思わずため息がこぼれた。僕は今聰美に会いたかった。会って聰美を抱きしめて現実を感じたかった。仕方なく、僕は聰美的携帯電話に連絡した。

『おかげになった電話は現在電波の届かない場所にいるか……』

僕はめげずに三回聰美的携帯電話にコールした。しかし結局聰美と連絡をとることは出来なかった。僕は神木の言葉を思い出しながら、その日眠れない夜を過ごした。

(5) 社長就任－1

翌日の定時後、僕は神木の指示通りに本社ビル一階のロビーにいた。滅多に来ることのない本社ビルにいるだけで緊張する。

まず右も左も分からぬ僕はまず最初に受付へ向かった。

本社ビルの受付嬢は僕達のいる雑居ビルの警備員などとは品格からして違って見えた。

「すみません」

「こんにちわ」

綺麗な笑顔が返ってきた。

「本日の一八時に神木執行役員と打ち合わせの約束をしている吉沢です」

「吉沢さんでいらっしゃいますね？ 少々お待ちください」

受付嬢は手際よく内線で僕の約束の確認をしている。

確認が終わると受付嬢は笑顔でこう言った。

「まもなくこちらに迎えのモノが参りますので、今しばらくお待ちください」

「分りました」

僕は受付嬢の邪魔にならないように、その場を離れロビーの長いすに腰を下ろした。暇つぶしに僕は周囲を見渡す。僕の過ごしている雑居ビルとは違って色々な人間が出入りしているようだ。

ぼんやりと時間を過ごしていると、僕の背後から誰かが声を掛けた。

「あなたが吉沢さんですか？」

僕は急いでいすから立ち上がって振り返った。

「ええ、私が吉沢です」

僕に話しかけてきた人物は神木ではなかった。僕の知らないのっぺりした風貌の若い男性だった。

「えっと、あなたはどちら様でしょうか？」

「申し遅れました、私は副社長秘書をしております柏木修平と申します」

副社長秘書という肩書きを聞いただけで僕は圧迫感を覚えた。どうやら僕は肩書きというモノに弱いらしい。

「今後の段取りを簡単に説明させて頂きます、どうぞこちらへ」

「はい」

柏木は先だって歩き始めた。僕は遅れないようにその後ろについて歩く。柏木は僕の方を振り返ろうともせず無言のまま一階の奥まった通路を進んでいく。すると通路の奥にいかつい警備員が二人立っていた。まるで門番のようだ。

「ご苦労様です」

柏木が形式張った口調でねぎらいの言葉を書けると、門番の一人も口ボットのようにこう返事した。

「社員証を拝見させて頂けますか？」

(5) 社長就任－2

柏木は立腹した様子もなくこれが当たり前といった様子で懐から金色の社員証を取り出すと警備員にそれを見せた。警備員は黙って頷く。そして今度は僕の方にその視線を向けた。

「そちらの方は？」

「ぼ、ぼくは……」

当たり前だが、僕は金色の社員証など持っていない。しどろもどろになる僕をフォローするよう柏木がこう言った。

「こちらの方は副社長の面会者です。身元は私が保証します」

「承知しました」

警備員達は柏木のその言葉を聞いてあっさりと引き下がった。

柏木は無言のままさらにその奥へとずんずんと進んでいく。さすがに僕はコミュニケーションのないこの状態が耐えられなくなった。

「あの、柏木さん」

「もうしばらくのご辛抱ですよ、吉沢さん」

「どういう事ですか？」

「今はまだ何も申し上げられません」

それだけ言って柏木は再び沈黙してしまった。沈黙したまま柏木は先を急ぐ。仕方なく僕はコミュニケーションを諦める。

そして柏木はひときわ大きなエレベータの前まで来てようやくその足を止めた。そのエレベータの前にはレッドカーペットが敷かれていた。そしてそのエレベータの停止階は一階と最上階しかなかった。

柏木は『昇』ボタンを押して、エレベータの扉を開くと僕に中へ入るように勧めた。

「こちらです」

「では、失礼します」

僕は緊張でこわばった顔が気取られないように、そのエレベータに乗り込んだ。エレベータ内の絨毯はふかふかだった。既にこのエレベータがどこへ通じているのかは自ずと理解することが出来た。

続いて柏木が乗り込むと最上階のボタンを押した。

エレベータは上昇を始める。

「あの……」

僕が口を開こうとすると、それを制止するように柏木が説明を始めた。

「これ以降の段取りについて簡単にお話させて頂きます」

僕の一番知りたいことだ。

「まず、吉沢さんには副社長より内示を受けて頂きます。既に神木執行役員から内々示を受けていらっしゃるかもしれません、現在のあなたはまだ課長です」

「ええ、承知しています」

(5) 社長就任－3

「ぼ、ぼくは……」

当たり前だが、僕は金色の社員証など持っていない。しどろもどろになる僕をフォローするよう柏木がこう言った。

「こちらの方は副社長の面会者です。身元は私が保証します」

「承知しました」

警備員達は柏木のその言葉を聞いてあっさりと引き下がった。警備員が道を開けると、柏木は無言のままさらにその奥へとずんずんと進んでいく。さすがに僕はコミュニケーションのないこの状態が耐えられなくなった。

「あの、柏木さん」

「もうしばらくのご辛抱ですよ、吉沢さん」

「どういう事ですか？」

「今はまだ何も申し上げられません」

それだけ言って柏木は再び沈黙してしまった。沈黙したまま柏木は先を急ぐ。仕方なく僕はコミュニケーションを諦める。

そして柏木はひときわ大きなエレベータの前まで来てようやくその足を止めた。そのエレベータの前にはレッドカーペットが敷かれていた。そしてそのエレベータの停止階は一階と最上階しかなかった。

柏木は『昇』ボタンを押して、エレベータの扉を開くと僕に中へ入るように勧めた。

「こちらです」

「では、失礼します」

僕は緊張でこわばった顔が気取られないように、そのエレベータに乗り込んだ。エレベータ内の絨毯はふかふかだった。既にこのエレベータがどこへ通じているのかは自ずと理解することが出来た。

続いて柏木が乗り込むと最上階のボタンを押した。

エレベータは上昇を始める。

「あの……」

僕が口を開こうとすると、それを制止するように柏木が説明を始めた。

「これ以降の段取りについて簡単にお話させて頂きます」

僕の一番知りたいことだ。

「まず、吉沢さんには副社長より内示を受けて頂きます。既に神木執行役員から内々示を受けていらっしゃるかもしれません、現在のあなたはまだ課長です」

「ええ、承知しています」

「副社長から内示を受けて頂く前に、神木執行役員と機密保持契約を結んで頂きます」

「とおっしゃいますと？」

(5) 社長就任－4

「普通の社員の方であってももちろん自社の情報を外部に漏らしてはいけません」

「ええ」

「副社長から内示を受けて頂く前に、神木執行役員と機密保持契約を結んで頂きます」

「とおっしゃいますと？」

「普通の社員の方であってももちろん自社の情報を外部に漏らしてはいけません」

「ええ」

それはその通りだろう。

「ましてや社長職に至っては事情が変わってきます。着任して頂くに当たっては特別な契約が必要となります」

「はい」

おそらく丸尾が話していた機密保持契約の事だろう。

「その様子ですと理解されているようですね」

「ええ、一応。つまり社長になる前から特別な機密保持契約を結べと？」

「さすがは次期社長です。察しが早い。これはあなた個人と会社における機密保持契約であり他の社員のそれとは全くレベルが違います。私が申し上げられることはこの程度です。詳しい事は神木執行役員から直接伺ってください」

「分かりました」

柏木と短いやり取りをしている間にエレベータは最上階に着いた。そしてその扉が開くと、そこには神木が待っていた。

「お待ちしておりました」

「後はお任せしました」

柏木はそれだけ言うと、僕がエレベータの外に出るタイミングを見計らってその扉を閉じた。

僕は神木に挨拶することにした。今後も何かと世話になるだろうと考えたからだ。

「お世話になります」

しかし神木は僕の挨拶に軽く微笑んだ。

「どうぞこちらへ」

神木は副社長室の隣にあった会議室の扉を開くと、そこへ僕を案内した。僕は神木に促されるまま、その会議室へ入る。会議室は思いの外質素だった。楕円の円卓一つにいくつかの椅子があるだけの部屋だった。

「適当に座って頂いて結構ですよ」

僕は遠慮無く適当な椅子を選んで腰を下ろした。神木は部屋に備え付けのインターフォンで何やら外に連絡をすると、適当な椅子に腰を落ち着けた。

(5) 社長就任ー5

しばらく無言の時間が続く。僕から話しかけた方が良いのだろうか？ それとも相手が話し出すのを待った方が良いのだろうか？ しばし逡巡する。

すると綺麗な女性がノックをして入ってきた。ショートカットの綺麗な女性だった。その女性は僕と神木の前にホットコーヒーを神木を置くと一礼して出て行った。神木はコーヒーに口を付けると、おもむろに話し始めた。

「さて吉沢さん」

先日あった際には確か『吉沢君』だったはずだ。つまり『君』付けから『さん』付けへと昇格したらしい。僕の心臓はバクバク言っている。課長になった時より遙かに大きな緊張感だ。

神木は足下に置いてあった鞄から分厚い書類を取り出した。

「どうぞ、ご確認ください」

僕は書類を受け取る。そして受け取った資料をパラパラめくるが字が小さい上にみっちり記載されていて要点すらくみ取れない。仕方なく僕は神木に内容を尋ねる。

「これは何でしょうか？」

「あなたと会社の特別機密保持契約書です。これを読んで頂いた上で契約を結んで頂かなくては話も先に進みません」

そう言われて改めて資料を眺めては見たものの、とても全てに目を通す事は不可能な分量だった。そもそも僕はこの手の資料を大の苦手としている。僕はさっさと諦めた。

「どうすれば良いかだけ教えてください」

「よろしいのですか、目を通しておかなくても？」

僕を射貫くような瞳で神木は尋ねる。

「はは、これだけの分量です。どうせ全部に目を通すなんて不可能でしょう？」

僕の少々投げやりな答えにも神木は別段に腹を立てた様子はない。

「では、最終ページに押印をお願いします。判子がなければ、血判でも構いません」

「け、血判ですか？」

「軽い冗談ですよ、吉沢さん」

神木は軽く微笑んだ。冗談を言って僕を和ませようしてくれたらしいが、今の僕にはちっとも笑えない冗談だ。

「さあ、では署名と押印をお願いします」

「分かりました」

と言いながら僕は一瞬本当にこの書類に署名しても大丈夫なものか迷った。

「どうされました？」

やはり神木には僕の顔が不安そうに見えたのだろうか。

「いえ、何でもありません。少し緊張して喉が渇いただけです」

僕はコーヒーを口に含んだ。口の中の乾きが少し和らいだ。

(5) 社長就任－6

そして僕はえいやと指定された箇所に署名と押印した。すると神木はさっさと僕の署名が入った書類を引き取った。そして満足そうに書類を眺めてこう言った。

「ふむ、これで私の任務概ね終了です」

「もう終わりですか？ 柏木さんからは神木さんに説明を受けるように伺っているのですが……」

「私が説明すべき内容は、この書類にすべて記載済みです」

神木は書類をぽんと軽く叩いて見せた。

「ええっ？」

「吉沢さんはすべてご納得の上で判子を押されたのでしょうか？」

「そ、そんな……」

そう言わわれては反論も出来ない。

「後は隣の部屋の副社長室で副社長から内示を受けて頂くだけです」

神木はにっこり微笑んだ。

「はあ」

やはり署名するべきではなかったのかもしれない。

「では吉沢さん、参りましょう」

神木は立ち上がった。

「あの、どちらへですか？」

「無論、隣の副社長室に決まっているではありませんか」

「そ、そうですか」

僕も立ち上がって、神木の後ろに続いた。

僕は神木に連れられて、隣の副社長室に向かった。

神木が軽くノックをして副社長室への入室の許可を求める。すると部屋の中から副社長とおぼしき声が返ってきた。

「吉沢君かね、入りたまえ」

神木は僕が入室しやすいようにドアの横に立ってこう言った。

「私は外でお待ちしております」

「分かりました」

僕は意を決して副社長室のドアを開いた。

副社長室に待っていた人物は恰幅の良い温厚そうな初老の男性だった。恥ずかしながら、僕は自分の会社の副社長をこれまで見た事がなかった。

「君が吉沢君かね」

「はい、そうです」

(5) 社長就任ー7

「私は副社長の山田だ、よろしく頼むよ」

恰幅の良い男は自己紹介した。

「君のような若手が丸尾君に引き続き我が社を背負って立ってくれることを私は嬉しく思うよ」

「いえ、ありがとうございます」

副社長から言われているのに今ひとつ実感に乏しい。丸尾もこんな感じだったのだろうか。僕はこの場にふさわしい言葉を適当に選んで回答した。

「誠心誠意努力いたします」

「ああ、頑張ってくれたまえ。これで晴れて君は『雲の上の人』だ」

「いえ、滅相もないです」

これは丸尾が失踪したおかげで手に入れたポジションだ。だから『雲の上の人』どころか『棚ぼたの人』だ。

「いやいや、君は人もうらやむ『雲の上の人』社長だよ。しかし体にだけは気を付けてくれたまえ。体調管理は自己責任だ」

「ありがとうございます。肝に銘じます」

「丸尾君の件も踏まえて君に対する人事異動の発令は一週間後だよ。後は神木執行役員にお任せする」

「かしこまりました」

僕は一週間後に社長になるのだろうか？

部屋を出ると入室前同様に神木は待ってくれていた。

「吉沢さん、内示は終わりましたか？」

神木はにこやかに微笑みながら僕にそう訊いた。

「ええ、何とか無事終わりました」

神木はそれに満足したらしい。

「さて吉沢さん、いや吉沢社長」

「えっと、神木さん。まだ少し早いですよ」

照れくさくて頬が熱くなった。

「良いではありませんか、こういう呼ばれ方には早いうちから慣れておいた方がよろしいですよ」

「はあ、そうですか」

頭をぽりぽりとかきながら僕は神木のおべっかに応えた。

「さて、吉沢社長。この先にある階段は見えますか？」

神木の指さす方向に目をこらすと確かにそこには非常用階段があった。

「ええ、見えます」

(5) 社長就任ー8

「あの階段を上ったところにあなた専用の部屋をご用意しております」

ここは確かに最上階だったはずだ。最上階より上と言うことは屋上だろうか？

「この上ですか？」

僕の不安げな口調を察してか、神木は僕を安心させるようにこう言った。

「大丈夫です、吉沢社長。先代の丸尾社長もご利用されていた場所なのです」

まあ、あの丸尾が使っていた部屋であれば大丈夫だろう。

「そうですか……。分かりました」

「上にＳＰが三人待機しています、詳細は彼らにお訪ねください」 やはり社長ともなるとＳＰが付くと言うことか。ようやく社長になったという実感が沸いてきた。

「分かりました」

僕がそう返事をすると、神木は最後にこう締めくくった

「私が付き添えるのはここまでです。では、ご武運をお祈りしております」

「ありがとうございます」

僕は神木に礼を言ってＳＰの待つという屋上へ通じる非常階段へ向かった。

非常階段から屋上まで一段一段階段を踏みしめながら僕は階段を上った。

僕は屋上へ通じる扉を開いた。

思いの外風はなかったが、そこは一二月の寒空。恐ろしいほどの寒さだった。僕は小脇に抱えていたコートの袖に手を通した。

「吉沢さんでいらっしゃいますね？」

「？」

振り返るとそこには三人の黒服の男性が立っていた。

いや、待てよ。こいつらはどこかで見覚えがある。そうか、丸尾に付いていた三人のＳＰじゃない。こいつらは丸尾が失踪した時、何をしていたのだろう。

「そうだ。僕が吉沢だ」

「先日はどうも……、吉沢社長」

リーダー格とおぼしき目の窪んだ男が僕に向かってうやうやしくお辞儀をする。

「挨拶はいいよ、僕を社長室へ案内してくれ」

三人のＳＰは顔を見合わせてクスクスと笑い始めた。

不愉快な連中だ。

「吉沢社長、あれが見えないのですか？」

「あれ？」

屋上には部屋らしきモノはない。あるのは販促用の気球くらいだ。しかし黒服のリーダー格はその販促用の気球を指さした。

(5) 社長就任ー9

「吉沢社長、あれがあなたの専用の部屋、社長室です」

何を言っているんだ、こいつらは。こんな失礼な連中は至急解雇だ。

「悪いけれど、僕はこんなくだらない冗談に付き合っている暇はないんだ」

僕は踵を返し屋上から撤収しようとする。すると、二人のＳＰが僕の両脇にがっちりと腕を絡めた。

「何をするんだ！」

「我々はあなたに社長室を案内する義務があるのです」

「何が社長室だ！ あんなものただの気球じゃないか！」

リーダー格の男が他の二人のＳＰに向かって命令を出す。

「吉沢社長を部屋の前までご案内しろ！」

「了解」

「離せ！」

暴れる僕を力でねじ伏せて強引に気球の前まで連れて行こうとする。

「何だよ？ お前ら、冗談のつもりか！ 物事には限度があるんだぞ！」

「我々は『神木執行役員』から指示を受けております」

このあり得ない非日常的現実はあっさりとＳＰによって肯定されてしまった。

僕は引きずられながら必死で尋ねる。

「気球じゃないのか！ あれは」

「正確にはロジエ気球と呼ばれるモノです」

無論、気球のタイプを訊いているわけではない。

「僕に一体どうしろというんだ！」

僕を気球の前まで連れていくとリーダー格の男は僕に向かって一言命令した。

「乗れ」

これは既に社長に対する態度じゃない。

力ではとてもかなわない僕は必死で最後の説得を試みる。

「僕は気球の乗り方なんて知らない！」

「これを読め」

リーダー格の男は無愛想に分厚い何かの資料を投げてよこした。僕はそれを腹で受け止めた。

軽い苦痛に顔をゆがめる。資料は僕の腹から落ちて地面に散らばる。

「両腕を離してやれ」

その言葉に従い、僕は二人のＳＰから両腕を解放された。

僕は屈んで地面に落ちた資料を拾い上げて内容を確認する。ＳＰが投げてよこしたモノはどうやら英語でかかれた分厚いマニュアルと一〇ページほどに纏められた日本語で書かれた気球の簡易操作マニュアルだった。

「僕は英語なんて出来ない！ というか僕が操作するのか？！」

(5) 社長就任－10

「社長たるもの第二外国語の一つくらいはなみがあって当然だろう」

S Pの一人が無情に突き放した。

「僭越ながら私からコレを……」

別のS Pが英和辞書を僕に手渡した。

「冗談だろ？」

僕はすがるように尋ねた。

「次はこいつだ」

S Pのリーダー格は気球のそばに置いてあった中型の段ボールを僕の目の前に無造作に置いた。段ボール箱には飲料水と記載されていたものと高カロリービスケットと記載されたものの二種類があった。

「何だ、これは？」

「見て分らないバカが聞いて分るのか？」

そう言うとS Pは三人揃ってへらへらと笑った。

ちきしょう、一対一なら思い切りぶん殴ってやるのに……。

「まあ、そうは言っても可哀想だから教えてやれ」

リーダー格の男が指示を出す。

「それは一、五リットルの水一二本と高カロリービスケット一ヶ月分だ」

「どうしろと？」

「食べる量はご自身でコントロールしてください。体調の管理は自己責任です」

「いや、そんな事は聞いていない……」

体調管理はともかく、こいつらは僕に一体何をさせたいんだ？

「最後にこれを渡しておく」

「コレは何だよ？」

最後に僕が受け取ったのは携帯電話にしては少々大きすぎるトランシーバーのような端末だった。

「それは衛星携帯電話だ」

「？」

何を言っているんだこいつは。

「通話時間も待ち受け時間も短い。非常時に限定して利用するがいい」

こいつらの言っていることはさっきから全然意味が分からぬ。

「いい加減にしてくれ！」

僕は叫んだ。

「お前達の言っていることはさっぱり分らない！ 一体何をどうしたいんだ？」

「ふん、やはりバカはバカだな」

リーダー格の男はぼそりと呟いた。

(5) 社長就任－11

「いいだろう。教えてやる、お前さんの仕事はこの社長室で過ごす事、つまり気球が風に流されないように上手くコントロールする事だ」

「どうして僕がそんな事をしなければならないんだ！」

「それが雲の上の人『社長』の仕事だろう？」

「！？」

僕は絶句した。まさか僕の冗談が本当だったなんて……。

「じゃあ非常時にはどうすればいいんだ！」

「一一〇番通報しろ」

当たり前に用に三人ＳＰのうちの一人は言い放った。

「お前達はＳＰじゃないのか？　僕を守るのが仕事じゃないのか！」

僕は怒りを堪えながら尋ねる。しかしＳＰの回答は意外なモノだった。

「俺たちの目的はお前が社長の内示を受けてから逃亡させないことだ」

僕は啞然としました。

「そして俺たちは社長を守るんじゃない、会社を守っているんだぜ」

そう言ってＳＰの片方がニヤリと笑った。

何を言っているんだこいつはバカじゃないのか。

「ひょっとして丸尾の時もそうだったのか？」

「守秘義務だ。答える事は出来んな」

仮に丸尾も同じように気球で飛ばされたと仮定すれば連絡がつかなかったことにも説明が付く。丸尾の公用携帯電話の待ち受け時間は持て二日が限界だろう。ということは、自分に電話を掛けてきたときはこの衛星携帯電話を使用したという事か。

「ちなみに、その衛星携帯電話による通話内容は情報管理部が監視している」

「ええ？　どういう事だよ！」

「通話内容によっては切断させて頂きます」

「酷いじゃないか！　冗談はやめてくれ」

「万一、警察に保護された場合も会社名を出さないように」

「どういう事だ！　やっぱり違法行為なのかよ？！」

「いや、許可は貰っているそうだ」

たとえ会社ぐるみのドッキリでも我慢の限界だ。こんな会社直ぐにでも辞めてやる。

「こんなふざけた話に付き合ってられるか！　僕は帰らせてもらう！」

「よろしいのですか？　奥様の……聰美さんでしたっけ」

どうしてこいつらの口から全く関係のない聰美の名前が出るんだよ。

「いいか僕の聰美、いや僕の妻は今実家に帰ってるはずだ！」

「くっくっく。確認は取れましたか？」

(5) 社長就任－12

「え、いや、昨日は連絡がつかなかった。今日は昨日の今日だし……。ま、まさか、お前達が聰美に何かしたのか！」

「我々の目的はあなたを気球に乗せる事。目的のために手段は選びませんよ、ご留意ください」「卑怯だぞ！」

「あなたは、自ら会社と特別な契約を結んだのです。文句を言うのは筋違いですよ」

「ぐう……」

神木から受け取った分厚い契約書が違法行為にまで言及しているとは……、全てが後の祭りだった。

「ちきしょう！　覚えていろ！　無事戻ってきたら、お前ら全員解雇だからな！」

S Pは僕の遠吠えを無視してこう言った。

「それではご武運を」

その後、僕は極寒の一月の夜空で文字通り『雲の上の人』になった。

(6) 雲の上の人たち－1

吉沢が副社長室だと案内された本社ビル最上階の一室、奥の席には一人の男が座っていた。男は資料の査閲と承認を黙々と行っている。そして男の胸には神木が吉沢に献上し、聰美が誤って捨ててしまったはずのネクタイピンがとめられていた。

そこへノックとともに別の若い男が入ってきた。

「失礼します」

一礼をしてその男性は奥の席へ向かう。

「社長、ご報告がございます」

社長と呼ばれた男は資料に目を向けたままこれに応じた。

「ああ、後一分だけ待ってくれ。今、午後の役員会の資料に目を通しているところだ」

「かしこまりました」

男は言葉通り資料の査閲と承認を一分で終わらせると立ち上がり、若い男性をソファに促した

。

「かまわんぞ、今は二人しかいない」

「では、遠慮無く失礼します」

二人は部屋の中央に配置された応接セットに座ると会話を始めた。

「実は我が社の吉沢さんの『趣味』で乗っていた気球が米軍によって撃墜されたそうです」

「そうか。吉沢も良い『趣味』をしているな。それで場所は？」

「神奈川県です。どうやら風に流されたようです」

「そういえば、米軍の制空権に近づかないよう注視していなかったっけか？」

若い男性はうっかりしていましたとばかりこう言った。

「これは、私としたことが忙しさにかまけて失念しておりました」

「まあ、俺や神木も普通の人間って事だな」

若い男性の正体は神木だった。

「僕には社長の真意が図りかねます」

「別に大した理由じゃない、俺はあいつを副社長にしてやると約束した。アレは万年ヒラの吉沢への最初で最後の昇進試験だ」

「私はしばらく吉沢さんの下で働きましたが、彼の能力では副社長に着任することは難しいとお止めしたはずです」

「まあ、俺が吉沢を買いかぶりすぎていたって事かな、がっはっは」

神木は社長の顔を食い入るように見つめる。

「本当にそれだけですか？ 丸尾社長」

「ん？」

丸尾はニヤリとほくそ笑んだ。

(6) 雲の上の人たち－2

「お父様でもある前社長がご病気で亡くなる一ヶ月も前に社長は内示を受けていたはずですが？」

「俺は飲み屋であいつと話をした時にあいつを試してみようと思ったんだよ。自分の会社とそのトップを甘く見ているあいつをな」

「それにしても社長の小芝居はともかく気球というのは少々大げさ過ぎる仕掛けではありますか？ 他にも吉沢さんを試す方法はあったでしょうに」

「あいつが『雲の上の人』になりたいと望んだんだ。昇進試験だけに気球だ。がっはっは」
神木は丸尾の胸元を指さして尋ねた。

「なるほど……、ところでそのネクタイピンは？」

「ん？ ああ、これな、コレの部屋に行った時に置いてあったモノを貰ったんだよ」

丸尾は小指を立ててそう答えた。

「それは私が吉沢さんに差し上げた物ですが」

「ほう、そうなのか。吉沢の『聰美』に代わって礼を言っておくぜ」

神木は鋭い眼光でこう言った。

「社長の本当の目的は痴情のもつれからくる吉沢さんの処分ではありませんか？」

丸尾は笑いを押し殺しながらこう答えた。

「くっくっく。まさか、友人の俺がそこまで考えるはずもなかろう。もっとも、痴情、いや地上でもつれて雲の上の人になるってのは洒落てるじゃないか。がっはっは」

「本当に大胆不敵と申しますか。丸尾社長というお人は底知れませんね……」

呆れたように神木がそう言うと、丸尾はあっさりとこう言い放った。

「一応、言っておくが俺は今フリーだ。聰美も後半年後にはフリーだ。俺たちの間に何の問題もない」

丸尾は社長職着任後直ぐに離婚していた。

「本当に酷い方ですね、丸尾社長という方は」

「ふん、だがそんな俺を抜擢したのはお前だろう？ 神木担当兼執行役員さん」

苦笑しながら神木はこう答えた。

「ふふふ、そうでしたね。我々役員はあなたの今後の活躍に期待していますよ」

「いや、しかし部下の素振りから気球の手配までアッサリとやってのけるなあ、お前は」

「いえいえ、いろいろな方のお世話になりっぱなしです」

「まさか、あの神木執行役員が実はお前の名前をもじった架空の役員だとは思わんよな。ところで、誰だよ、あのオッさん？」

「売れていない役者さんですよ。私もあの演技力に感服しました」

「使えそうだから契約社員として雇っておけ」

「承知しました」

(6) 雲の上の人たち－3

そして、二人の短い歓談が終わると神木は立ち上がってこう言った。

「さて、ではさっそく吉沢さんのウチへ行って参ります」

「何か用事か？」

「香典の手配をして参ります」

今度は呆れたように丸尾がこう呟いた。

「本当に優秀な奴だよ、お前は」（了）